

A 4 7 / 2 3

神奈川学園フィールドワーク「水俣」

— 10年間の取り組み —

岩瀬 幸子 (神奈川学園中学校・高等学校)

はじめに



神奈川学園は1914年（大正14年）創立。「女子に自ら判断する力を与ふること」「女子に生活の力量を与ふること」を建学の理念として掲げた、中高一貫教育の女子高である。横浜駅から徒歩12分くらいの高台に位置する。1学年は、約40人学級の5クラスで、全校約1200人の学校である。

従来、本校でもいわゆる「修学旅行」として学年全員で同一の旅程を体験する宿泊行事を長年実施してきた。しかし、新学習指導要領で「総合的な学習の時間」が導入されていく中で、本校でも総合学習、五日制の検討が始められてきた。学力問題を最大の焦点としながら、21世紀教育プランとして「総合学習の位置づけ」「学びの転換」を、職員会議や教育研究集会で討議を重ね、職員会議で修学旅行からフィールドワーク（以下、FW）への変更、4方面とテーマが決定された。生徒たちは、4つの方面（沖縄・四万十川・京都奈良・水俣）から自分の希望する一方面を選択し、週2時間の事前事後学習とともに現地を訪問することになった。FWは2010年度で10年目になる。その節目に本編である「取り組みの記録」と「資料のレポート編」の2冊のまとめの冊子を作成する機会を得ることができた。（左上写真）その概要を報告していきたい。

1. FW 実施までの経緯

本校の修学旅行の歴史は戦前にまでさかのぼるが、1966年に高校3年4月の6泊7日の九州方面の旅行という形式に定着をした。取り組みが集団的になっていく中、修学旅行の行事も発展していく。1980（昭和55）年の高校修学旅行で、長く途絶えていた「長崎自主行動」が復活し、平和学習もまた充実していった。1991～1992年の移行を経て、1993年から5泊6日、広島で1日、京都、奈良に各2泊の修学旅行が実施された。京都では、クラス別行動日と終日班別自主行動・奈良では全体見学と終日班別自主行動が行われた。広島では長崎から引き継がれた平和学習が位置付けられ、資料館の見学・被爆者の方のお話・コース別行動が行われた。2000年度最後の修学旅行まで、学年の修学旅行担当者が広島に下見に行き、事前学習や学年便りによる平和学習に取り組み続けた。

2. FW 水俣現地行程10年の歩み

FW 水俣の立ち上がりとなった2001年度は、水俣のみでは生徒が集まらないのではないかと危

惧から、水俣と共に長崎の行程も含まれていた。しかし、実際には FW 当日に水俣を離れる際、「水俣から離れたくない」という生徒がでるほど好評だった。そのため、翌年度から水俣だけの行程に変更をしていくこととなった。2002年度は鹿児島空港から現地に入り、山の体験をし、市街地に移動、水俣病事件の証言などを聞いた。この年は分宿も1泊実施した。3年目の2003年度から1日目に海から入り、2日目に水俣病の証言を聞く、3日目に山の体験とコンサート、4日目に海の体験という形式が確立する。この3泊4日の中で、全員で水俣の人の話を聞いたり、2日目・3日目の班別行動で事前学習や夏のレポートを通じて深めてきた自身の関心のあるテーマから出会う人を選び、話を伺う。現地での体験は「人に出会う」ということが根幹となっている。

3. 今年度の取り組み：現地へ「水俣」と出会う旅

1. フィールドワーク水俣のねらい (プレゼンの時、配布した水俣のプリントより)

「人間の尊厳を探求する旅」

FW の授業の中では、講義やビデオ・大村さんの講演等、様々な学習をし、夏休みにはそれぞれが自分で課題を選び、レポートを作成します。事前学習の中で自分の課題を明らかにしながら水俣に向かい、現地では、水俣病の患者さんに会います。患者さんとともに生きた人たちに会います。水俣の再生に取り組んでいる人に出会います。豊かな自然に出会います。水俣の厳しさと豊かさに向き合い「人間の尊厳を探求する」こと、「言葉」を「声にならない声」を受け止める旅を自分で創る、それが水俣の FW です。「自分の水俣」に出会いながら、自分と向き合い、生き方を見つめ、「今をいかに生きるか」を考える・・・自分と向き合うことが要求されるのが水俣です。

2010年11月8日(月)～11日(木) 3泊4日で「水俣に出会う旅」に行った。(行程は以下の表)

	11月8日(月)	11月9日(火)	11月10日(水)	11月11日(木)
2010年	<ul style="list-style-type: none"> ・熊本空港到着 ・茂道散策 ・杉本家の船で水俣湾をめぐる ・杉本雄氏講演 	班別行動 ①葛渡小学校・ほたるの家(坂本しのぶ氏) ②山下善寛氏と巡る ③山近峰子氏(協立病院)・ほっとはうす ④大石利生氏(不知火患者会)・大矢理巳子氏 夜：板井八重子氏講演	・班別行動(山の体験) ①愛林館 ②頭石村丸ごと生活博物館 ③天野茶屋 ④浮浪雲工房 夜：柏木敏治氏コンサート(水俣病資料館にて)	<ul style="list-style-type: none"> ・芦北町での打瀬船体験 ・福田農場訪問



O・Y (一部略)

水俣から帰って

わたしは、ひとびとの思いに触れ、水俣が未来に発している「何か」を感じ取ることができればいいなと思い、この方面を選びました。現地に行く前、わたしは患者側やチッソ側の意見を偏らない形で聞いて、自分の考えを作っていきたいと思っていました。そして実際に現地に行くことで、水俣の新しい一面や、現地に対する印象が大きく変わりました。

1日目に、漁師である杉本雄さんのお話を聞き、当時は漁師が人間として扱われていなかったと知りました。無視された存在であったために、警察が介入せず、そして今でも介入のない状態が続いていると知りとても驚きました。漁師に対する「溝」が水俣病の被害を大きくしたのではないかと、情報の伝達手段があまりなかった時代、正確な情報が伝わってさえすれば被害を減らせたのではないかと、という杉本さんの意見に、わたしも本当にそうだなあ、と思いました。水銀が原因だとわかっては謝らず、海を浄化するふりまでしたチッソも、裁判をやり始めた被害者を「金の亡者」と差別した人々も、なんだか人間の汚いところばかりがあらわになっていて、しかしだからこそ考えていかねばならない問題だと思いました。杉本さんがおっしゃっていた「我欲を捨てて、誰かのためを思う」ということができる人間になればいいと思います。

2日目の夜に聞いた板井八重子さんのお話は、具体的な問題点を挙げて説明してもらいとても参考になりました。現在から未来への問題提起の内容をもっと具体的に調べて深めたいと思いました。そして、考え続け行動し続けること、わからないなりに命と向き合うこと、理不尽さに負けず決してそれを許さないこと。たくさん大切なことを教わりました。水俣病を他人事とは思わずに、自分にひきつけて考えたいと思います。

3日目と4日目はたくさんの方に触れ、「海」だけではなく新たな水俣を発見することが出来ました。山下さんがおっしゃっていたことなのですが、「人間として、労働者として、どう生きるべきかは何者にも変えられないこと」そして「水俣病は命、人間性の問題であり学ぶべき課題」「水俣病は日本の縮図、これを通してたくさんの方を学んでほしい」という言葉が心に引っかかっています。先生が、「本物の水俣に出会えた事でやっとスタートラインについた」と言っていて、そのとおりだなと思い、ここからまた新しく水俣について、そして「命」について考えていこうと思いました。

4. 今年度の取り組み：1年間の授業の流れ

地域に分かれて活動していくが、高2の学年としては大事な柱になる行事になる。年間を通してながら、「クラスのもの」に「学年の力」にしていく取り組みを行っている。

月	学年	地域
4月	* FWの取り組みについて : 学年集会 * 地域ごとのプレゼン * 1000字作文と地域選	
5月～7月		地域ごとのFWスタート
夏休み		自分のテーマでのレポート (地域ごとに異なります)
9月～12月	* FW委員を決める(前期クラス委員を中心に) * 学年として研修旅行の意味や部屋割り等の原則を考える * クラスで「現地に行く決意」を一人ひとりが語る	地域ごとの授業
	* 11月8日(月)～11日(木) 現地に	
	* 「現地で学んだこと」感想を書く * クラスで「現地で学んだこと」を一人ひとりが語る	
冬休み		一年間のまとめのレポート (地域ごとに異なります)
1月～2月	* 伝える会に向けての意味を考える * 高1に伝える会 * 保護者に伝える会	地域ごとの授業 入試休み明けに最終レポート 完成

現地に行くまでの事前授業では、水俣病事件に関する基礎知識にふれるとともに、想像することを大切にしていけるように取り組んできた。「具体的な患者さんの生き方や言葉にあたることで気持ちを想像すること」「自分たちが立脚している豊かさの前提として水俣病事件をとらえてみること」「自分がもし加害企業チッソの社員だったらどうしたか」——。こういった視点を盛り込んで、患者さんたちの闘いやチッソについてなどの学習を組んできた。

1学期の授業が終わり、夏休みには生徒は自分の関心を創り・深めるために夏のレポートに向き合う。そのために事前の面接指導を授業担当者が手分けをして行い、自分自身のテーマを持ちレポートに取り組む中で、「なぜ自分は水俣に行くのか」が少しずつ生徒にも見えてくる。

しかし、生徒にとって何より自らの身体や心にくぐって水俣を理解するのは、現地での豊かな出会いであることを、この記録集が証明している。生徒は現地で人間の魅力に感動し、自然と自分とのつながりを強く感じとる。

現地から帰っての授業。これからはまとめの時になる。それぞれが受け止めてきた言葉を出し合い、生徒が拾った言葉から深めるテーマを検討し、今年度は全員で出会った杉本雄さんの言葉を考える授業を最後に行っていた。自分の毛髪水銀の調査も行った。

最後の授業は生徒と一緒に授業を作ろうと考えた。生徒が「水俣に行って生きるということ考えた。」と言う。私たちが答えがなく、色々に考えていくことのできる

内容だと考え、一緒に考えるテーマを「生きる」とした。それぞれに語る中身は色々あり、「立ち止まって考え、違うけど共有できた」と思える時間にすることができた。

冬休みに最終レポートを課す。最終章は、一年間の自分のまとめになる。「自分」と向き合って考えた記録。今までの最終章では、いじめの問題や自分の体のこと、家族のこと…今までの自分を振り返りながら自分を語ってくれたものもあった。よく書いてくれたと思うものもあった。原田先生の「水俣は自分を映す鏡」という言葉のように、自分たちに向き合ってくださった水俣の方たちに、誠実であろうとする生徒たちの大事な記録であり、宝物である。(この最終レポートを今までの生徒から3人選び「資料のレポート編」を作成した。)

2月は「伝える」時である。一年間共に学んできた FW 水俣の仲間、高一に、父母に「伝える会」を行い一年間の自分、最終章の自分を語っていく。

まとめにかえて

神奈川県学園高校2年生の FW が10年目になる節目に、まとめの冊子を作成する機会を得ることができた。この機会を与えてくださった(財)日本私学教育研究所の皆様にお礼を申し上げたい。そして、水俣に行くと学校としても、生徒に対しても、私個人としても本当に大事にしていると思う。お世話になってきた現地の方々に心から感謝したい。

神奈川県学園の FW までの変遷を振り返った時、改めて「生徒の現実」に立脚し、「生徒の可能性」と「平和」を大事にしながら、改革を進めてきたと確信できた。私学であることや時代の中で、向かい合う生徒たちは変化していく。これからもそのためにカリキュラムを替えていくことが求められるだろう。大事にしてきたものを譲らず、現地の力をお借りしながら、生徒にとって意味のあるものを作っていく努力をしていきたい。

担当してきた私にとっても水俣の人たちの生き方に出会い、自分と向き合いながら、「私」の水俣がある。出会った生徒にとって「一つの種」となり心に残っていくことを願って、「水俣」との出会い、「人」との出会いを繋げていく努力をしていきたい。

(本編には、卒業生の言葉から・共同執筆者の小川輝光氏の文・その他資料等が含まれている)

